

# **長野県立松本工業高等学校遺跡**

## **緊急発掘調査報告書**

**昭和56年3月**

**長野県立松本工業高等学校  
松本市教育委員会**

## 序

昭和55年度に待望久しかったプールの建設工事が着工される運びになりましたが、本校の地籍は古くから古代遺物の包蔵地で知られており、県の遺跡台帳にも松本工業高校遺跡として登録されているので、着工に先だって緊急に発掘調査をすることが必要になりました。

そこで県教育委員会文化課のご指導のもとに松本市教育委員会社会教育課に現地調査を依頼し、統いて発掘調査をお願いいたしました。

市教育委員会では中島豊晴先生を団長に、中信考古学会の山田瑞穂先生、太田喜幸先生を調査員に依頼され、また本校の生徒会、風土研およびインタークトクラブの諸君も参加して発掘調査を実施しました。

この調査は丁度夏の暑い時期で大変ご苦労をおかけしました。

その後発掘された遺物の整理検討がなされ、ここに発掘調査報告書としてまとめられたことは、松本工業高校遺跡を解明する上で極めて貴重なものであるとともに、本校にとっても大変有意義なことであり、喜ばしいことあります。

今回の調査にあたりご尽力下さった皆様方に心から謝意を表して序といたします。

昭和56年3月1日

長野県松本工業高等学校長

鋤 柄 伸



松本工業高等学校プール建設予定地

発掘調査前の体育馆東側

## 例　　言

1. 本書は昭和55年度、長野県松本工業高等学校プール建設に伴う緊急発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆は発掘調査団長中島豊晴が中心に担当する予定であったが、急病のため調査員山田瑞穂、太田喜幸、神沢昌二郎、北野進が行なった。その内容の責任は執筆者にある。
3. 編集は松本市教育委員会の神沢昌二郎、松本工業高等学校北野進が担当した。
4. 卷末には発掘調査に参加した松本工業高等学校教職員、生徒の感想文「発掘調査に参加して」を集録した。

## 目 次

序	.....	学校長 鶴柄 伸	1
例 言	.....		3
 I 調査 経過 ..... 北野 進 5			
1. 発掘調査に至るまでの経過	.....	タ	5
2. 調査日誌	.....	タ	5
 II 調査			
1. 遺跡の環境	.....	神沢 昌二郎	8
(1) 遺跡周辺の自然環境	.....	タ	8
(2) 周辺 遺跡	.....	タ	9
2. 調査結果	.....		11
(1) 調査	.....	山田 瑞穂	11
(2) 出土遺物	.....	タ	18
① 弦生式土器	.....	タ	18
② 土師器	.....	山田 瑞穂	18
③ 須恵器	.....	太田 喜幸	15
④ 灰釉陶器	.....	タ	18
 III まとめ ..... 山田 瑞穂 20			
 IV 発掘調査に参加して 22			
鶴川の流れ	.....	北野 進	22
松工二度目の発掘	.....	矢島 純一郎	23
グリッドP-10を発掘して	.....	大川 東	24
発掘調査に一日参加	.....	黒木 恵美子	26
プール建設の影に	.....	赤羽 幸子	26
炎天火の発掘	.....	三村 文良	27
二度目の発掘	.....	柴 晴則	28
夢中で探した土器の破片	.....	閏 美樹	29
古代と現代をつなぐ土器	.....	矢ヶ崎 美保子	29
自分の手による発掘	.....	丸山 元靖	30
見つけた土器のかけら	.....	笠井 誠司	31

# I 調査経過

## 1 発掘調査に至るまでの経過

松本工業高等学校は昭和47年度からの全面改築もほぼ完了した。近代的な校舎、体育館とともに優れた産業教育設備を持つ中南信地区随一の工業高等学校として、その偉容を誇っている。しかし、校内プールを持たなかったので再三にわたって県に対しプール建設の実現を要望していた。

いよいよプール建設が具体化し、学校敷地東側の農地を買収して昭和56年6月30日竣工の予定で、用地買収をはじめとする各種作業が行なわれることになった。半年に近い用地交渉は、卒業式前の昭和55年8月5日調印を見たが、第二段階では「松本工業高等学校遺跡」周辺地であるために発掘調査を実施しなければならなかった。その着手実現までには用地交渉段階に劣らず難航した。

当時、松本市教育委員会社会教育課と中信考古学会では国宝松本城二の丸遺跡を始めとする数ヶ所の発掘調査が、既に実行段階に入っていた。したがって「松本工業高等学校遺跡」までは手が廻らない状況にあった。

機度かの検討を繰返した結果、補助員、經理一切等について学校側の全面的協力態勢が約束され、参加生徒等の事前研修も実施された。

7月19日には学校対松本市、7月21日には松本市対松本工業高校遺跡調査会とそれぞれ業務委託契約が締結され、8月の学校夏季休業の間に発掘調査を行なうことになった。

## 2 調査日誌

7月6日(土)

松本工業高等学校会議室において発掘調査に関する打合せ会が行なわれた。発掘方法、日程、事前指導、準備などの詳細について話し合い調査団の先生の指導のもとに学校独自の発掘を行なう方針を決定した。

会議の出席者は次の通りである。

松本市教育委員会 神沢昌二郎

調査団長 中島豊晴

山田瑞穂(三郷小学校教諭)

太田 喜幸(木曾東高校教諭)

学校側 鐘柄 伸 校長  
川上 輝 教頭  
山田 宏一郎 (事務)  
北野 進 (松工風土研究会顧問)  
矢島 純一郎 (松工風土研究会顧問)  
上条 宏信 (松工生徒会顧問)  
平出 武嘉 生徒会副会長  
三村 文良 インターアクト会長  
丸山 元靖 風土研究同好会会長

#### 7月中旬

風土研究会のメンバーが発掘學習会の資料を印刷製本し、放課後、発掘参加予定者50名(生徒会役員、インターラクター、風土研究会)を集めて事前の勉強会を実施した。同時に発掘参加者名簿を作成した。

#### 7月下旬

放課後数日にわたって発掘予定地の草刈りを風土研究会のメンバーによって実施した。草刈り終了後、発掘区画(グリッド)の杭打ちを完了して8月4日からの発掘調査の設取りを終了した。

#### 8月4日(月) 曇り

調査団長中島豊晴、山田瑞穂、太田喜幸先生、松工風土研顧問北野、矢島先生、以下生徒18名により、発掘地点内20グリッドを発掘した。午前中P-10グリッドの疊層より10cmくらいの土師器の底が出土、P-22グリッドより灰釉陶器が出土した。軸輪回転による糸切痕や輪轍整形痕の見られるものも多数出土した。

#### 8月5日(火) 晴れ

団長以下調査員、生徒16名により24グリッドを発掘した。土師器、灰釉陶器などの小片が多数と鉄くぎも出土した。しかし遺構は発見されなかったので発掘調査を一応打切ることを検討した。

#### 8月6日(水) 晴れ

風土研究同好会員および顧問によって午前中発掘を継続した。午後より測量実測作業を行なった。

8月7日(木)

前日に引き継いで発掘断面の測量を風土研究会のメンバーによって実施した。

8月下旬

発掘土器破片の水洗いと整理を放課後の時間を利用して実施した。これと平行して測量図面の整理を風土研究会の丸山元靖が中心になって行なった。

=発掘調査に協力した生徒=

丸山元靖、古畑昇、山田満彦、笠井誠司、山上清武(松工風土研究同好会)。大川東、平出武嘉、赤羽幸子、黒木恵美子、水谷繁之、佐々木茂雄、日野原利治、山本秀孝、種山保(生徒会)。柴晴則、三村文良、矢ヶ崎美保子、望月美奈子、関美樹、藤田誠、小林康富(インターナクト)。大谷、野島、矢崎、山崎、西沢、藤沢(電気工学)

[北野進]



発掘を終つて

昭和55年8月5日(火)撮影

# II 調査

## 1 遺跡の環境

### (1) 遺跡周辺の自然環境

本遺跡は松本市の東側やや南寄りにあり、筑摩山脈につらなる三峯山や原峰村近を源流として西流する薄川左岸にある。東側1kmあまりには林城山から南西に仁能田山へと続く標高800mあまりの中山性の山が連なり、和泉川をへだてて中山丘陵へと続く。北側には薄川を経て市街地へと続く、西側にも住宅地が続いている。

薄川は数次にわたって氾濫したらしく、本遺跡南東の富士電機工場敷地造成の際、1.5mあまり掘削した地点で厚く砂礫層が堆積しており、その南の神田、西の筑摩周辺では砂礫土の畑になっている。学校敷地および今回発掘地点も氾濫原であったため疊が多い。薄川右岸についても同様で、蓋糸公園周辺で鉄塔建設工事および庁舎建設工事が行なわれた際の所見では、表土（耕作土）が約50cmで、以下は疊層であった。又昨年行なわれた県遺跡発掘調査の際の所見では僅かな距離でも大疊層、疊層、砂層、シルト層等と大きく変化しており、河川の氾濫やあるいは淀みなどその時々の河川の消長を思われる。

湧水は松工高敷地からも自噴しており、筑摩一帯は水位は高い。しかし、最近は自噴する井戸あるいはカマは少くなっている。右岸をみると、県町周辺でも水位は低くなっている。夏期に自噴している井戸は旧若松町通りで1件、左岸は女鳥羽川寄りの中央3丁目の一帯、旧日の出町通りに自噴が多い。

耕作状況をみると、過去松工高西側は桑畠が多かったが、現在は住宅地となっており、東側には揚水を利用しての田畠と葡萄園、桑畠などが残っている。

松工高敷地は薄川より約100m南にあり、標高は約610mを保っているが、旧地形は南西に低くなっている。校庭は石積みを2m近く行って平面を保っており、逆に北及び東側は土をすいて敷地を造成している。敷地内には西流する小用水があり、整地以前よりの用水である。

今回発掘地点は既存校舎敷地より70cmあまり高く、砂利っぽい畑であり、河川の氾濫原を開墾したものである。

参考文献

〔神沢昌二郎〕

東筑摩郡、松本市、塩尻市誌第1巻 自然

## (2) 周辺遺跡

周辺遺跡については自然環境と同様に前回行なわれた報告書と全く同じものであるが、昭和54年8月以降の発掘・表面調査により加筆訂正をして正しいものにしてゆきたい。

薄川を中心として東山一帯には数多くの遺跡があり、弥生・土師時代の遺跡が多い。

先土器時代は和泉川左岸・弘法山古墳東隣よりポイント1点が採集されている。

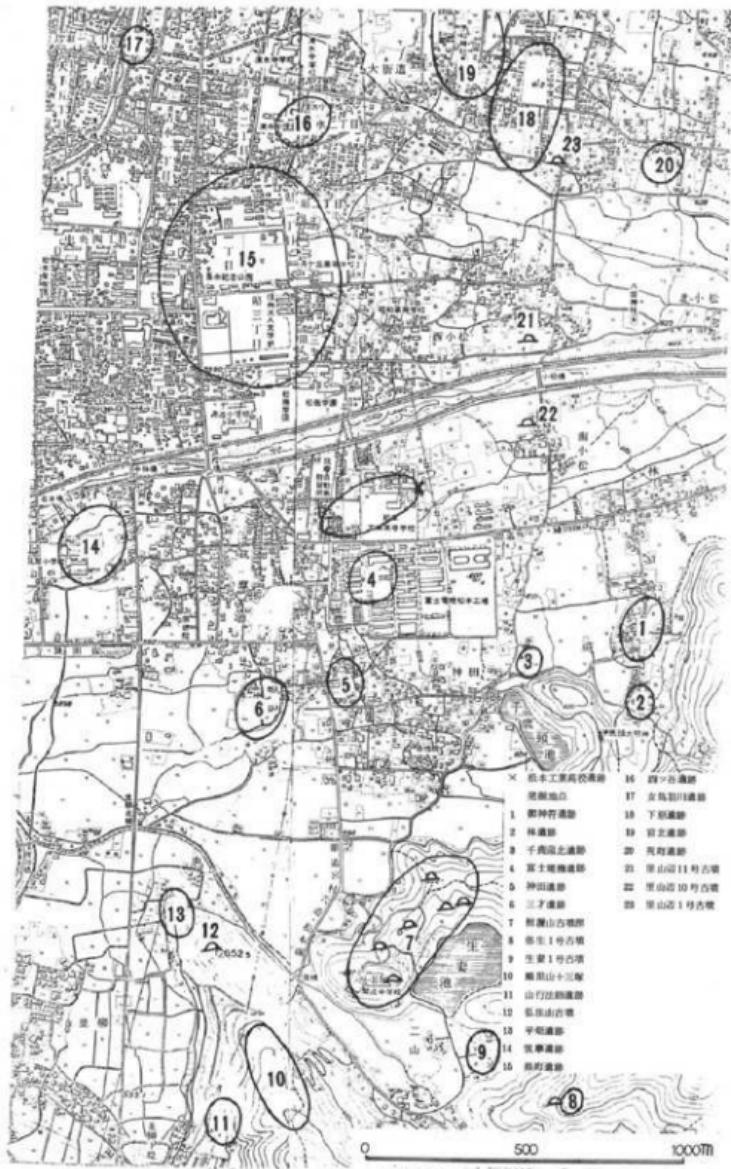
縄文時代は東山山麓から市街地に西下するにしたがって数が多く、薄川右岸では四谷に加曾利E式に属する完形土器が、埋橋に凹石、大形石棒が発見されており、左岸では林城山西麓の山越遺跡より石棒が、神田地区集落内、筑摩小学校東側よりも土器片が採集されている。また千鹿頭山北側の葡萄畠よりは横山水藏氏により永年に亘って採集され、縄文中期土器片と打製石斧が発見されている。他方南側の弘法山西麓、平畠遺跡からは石鐵が採集されており、更に南方の山行法師遺跡では縄文式土器と人骨、宋銭の出土をみている。

弥生時代の遺跡はほとんど土師期と重なっているが、右岸ではやや上流では里山辺針塚遺跡より条痕文と引摺文のある壺形土器が出土しており、それより下って清水小学校周辺、県ヶ丘高校敷地、旧松本高等学校敷地などと、広範囲より出土している。特に旧松高敷地では昨年8月の発掘調査により、火災にあった住居址と推定される遺構より、弥生中期後半の百鶴式土器に比定される甕、台付甕等の他、石器製造工房かとも思われる遺構より打製石包丁、磨製石鎌、扁平片刃石斧、砥石等の一括出土をみた。左岸では本遺跡のほか筑摩神社南方地点、富士電機敷地、神田保育園敷地、筑摩小学校東などより、百鶴式から箱清水式にわたる遺跡が存在している。

古墳時代に入ると右岸では里山辺宮周辺に積石塚群があり、西へ下って清水小学校西側埴塚より小形八腹鏡と灰釉のかかった壺・环が発見されており、更に南西へくると旧松本高等学校敷地内に県塚第1号、県蚕業試験場桑畠内に県塚第2号の古墳ではないかと言われているものがあり、この南側の松商学園敷地内より直刀と半欠の瑞花双鳥八腹鏡が発見されている。

左岸では林城山の麓、標高約640mに御神符古墳があり、直刀が検出され、それより南西方向の山腹あるいは山の突端に生妻古墳、棺蓋山古墳群があり、特に棺蓋山古墳群のうち開成中学校敷地内よりは直刀5本、劍、鐵鎌有孔砥石などが検出され、また校庭造成の際に調査された中山86号墳からは船載鏡1面と土師器1点を検出している。更にこの西方、中山丘陵の北端に前方後方墳の弘法山古墳があり、礎郭内より三角縁獸文鏡1面、ガラス小玉、鉄斧、鐵劍などを検出している。平地にもどつて、松工高遺跡より東方田畠内に里山辺第10号古墳があり、直刀、馬具等が発掘により出土している。

奈良、平安時代になると前出の弥生時代遺跡と重なっているものが多く、薄川右岸では里山辺の荒井、北小松、本郷の惣社、県ヶ丘高校敷地、蚕業試験場敷地、旧松本高等学校敷地、松商学園敷地、



第1図 周辺遺跡図

四谷、埋構など一帯にわたり、旧松本高等学校敷地では前述の発掘の折平安後期の住居址が検出され、住居址内より金メッキされた譲子(さいし)が1点出土した。この遺跡からは土師、須恵、灰釉陶器片が多量に検出され、布目瓦も三片検出されている。一方左岸では本遺跡の他富士電機工場敷地、神田保育園敷地、神田中村和人氏宅地の他神田、三才、筑摩等巾広い範囲にわたって土師、須恵、灰釉陶器の出土をみている。

〔神沢昌二郎〕

=参考文献=

東筑摩郡、松本市、塙戸市誌第2巻 歴史(上)

## 2 調査結果

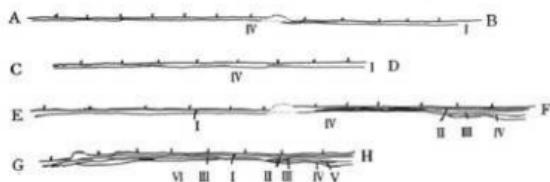
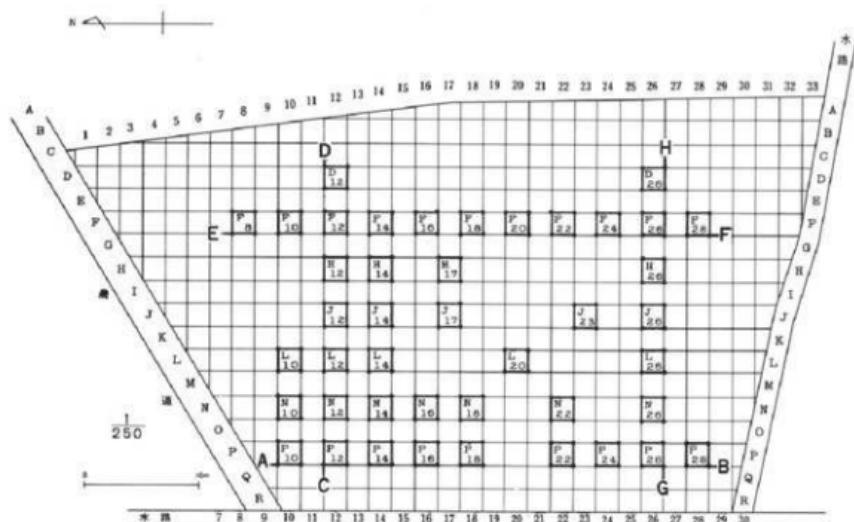
### (1) 調査

体育館東のプール建設予定地へ第2図のように2mのグリットを設定して発掘調査を実施した。残念ながら何ら遺構の確認はなく、少量の出土物を得たのみで終了した。

用地の北半分は普通畑、南半分は水田になっているので、土層には若干の違いが観察された。土層断面図(第2図)は南北方向のP列西壁をA～B断面、F列西壁をE～F断面、東西方向の12列北壁をC～D断面、26列南壁をG～H断面とした。これでも判るように北側普通畑は20～35cmの砂混りの黒褐色の耕作土から疊層に移行している。疊層の状態をみるとP10グリットの掘り下げを試みたが1.6mをしても変化なく、拳大から僅20cm程の礫の累積であった。校門近くで以前ボーリングを7mしたがずっと疊層が続いたとのことで、そのサンプルも保管されている。P10グリットの疊層上部から須恵器片の出土があった。磨耗が少ないとから遠距離を流されたものでないことがわかる。

南側水田は15～20cmの耕作土の下に床土である赤褐色土があり、F列断面でみると以下に黄褐色土層があって疊層に続いている。自然流があったと考えられる。D26、F26～28グリットにかけては黄褐色土層の下に黒色土層の堆積があって疊層に移行している。この間表土より約1mを測定する。

東西方向は26列断面では水田造成が行なわれているので定かではないが、自然流の痕跡もあってやや起伏に富んだ土層を呈している。畠地の12列でみると東から西へわずかに傾斜する土層が一般的なものであろう。



A - B	P列西側セクション	I 表土(耕作土)
C - D	12列北側セクション	II 赤褐色土層
E - F	F列西側セクション	III 黄褐色土層
G - H	26列南側セクション	IV 黑褐色土層
		V 黒色土層
		VI 硫化層

第2図 グリット図及び地層図

遺物は大部分が礫層直上に多く、また耕作土の浅いことから表面に出ているものもあった。後述するようにすべて小破片であった。

## (2) 出土遺物

今回調査による出土物は少量であり、すべて土器片であって完形品は一点もない。内容は、弥生後期土器片、土師器片、須恵器片、灰釉陶器片である。これは、前回58年度の格技室新設に伴う緊急発掘調査の時と出土遺物は同一内容であるが、量的には差異がある。

今回の出土遺物中には特記すべきような特長を有するものではなく、ごく一般的な内容をもつものである。以下説明を加えたい。

### ① 弥生式土器(第3図1)

一片だけであるが甕形土器片と思われるものの出土があった。茶褐色を呈し、器外面に黒く「スス」の付着がある。胎土、焼成ともによく、器外面に乱れた波状文が施されている。弥生後期前半に比定されるものである。

### ② 土師器(第3図2～17)

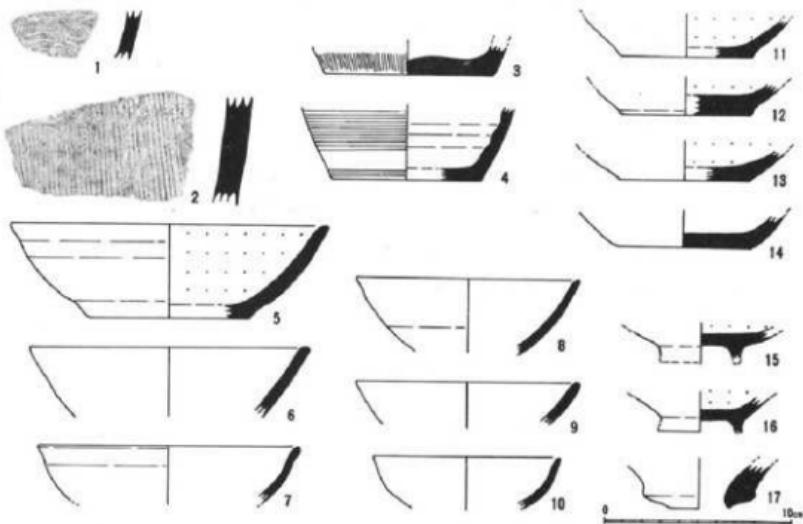
器形で分けると甕形、壺形、瓶形？土器の出土があった。

#### 甕形土器(2～4)

大形甕と小形甕の二種に分けられる。2は大形甕の脇部片で、縦方向に整形痕が残る。胎土はよく焼成も茶褐色を呈してよく焼きしまって堅い。器内面はこの種土器によくみられるように起伏に富んだ凹凸がみられる。3・4は底部片である。3には縦方向、4には横方向の整形痕が残る。この横方向のものは小形土器が多い。底径8～9cm程度4にはロクロ成形痕が残る。

#### 壺形土器(5～16)

大きく壺形土器としたが、楕円形土器と呼んだ方がよい5のようなものもある。いずれも小破片の図上復原であるため正確な数値は求めがたいが、口径は5のような17cm程の大目ものの、6、7のような14～15cm程の中位のもの、8、9のような10～12cmの小き目のものと三別できるようである。いずれもロクロ成形によるもので底部には糸切痕を残し、5を除くと高台のつく15、16は底径5cm程、つかない11～14は底径7cm程である。全体的に細かい粘土を使用しているため胎土はよく、焼成もよいため黄褐色ないし茶褐色を呈して焼きしまった感じのものがある。また5、11～13、15、16のように内面黒色を呈するいわゆる内黒土器もある。



第3図 松本工業高校遺跡出土遺物実測図(1:8)

次に図示した2, 3について説明を加えたい。

5はF26グリット出土のものであり、今回の出土土器の中で唯一一つ図上復原をして器形の判明するものである。口径17cm、底径8.5cm、高さ5cmを測るもので、やや大き目のものである。黒褐色を呈して胎土・焼成とも良好であり、ロクロ成形による細かい整形痕が器外面に残り、底部は糸切痕がある。内面黒色土器であり、底部から内壁気味に外傾した器形をとっている。

7はN12グリット出土の口縁部破片であり、推定口径14cmである。黄褐色をして胎土・焼成とともに良好である。口縁部が内壁気味から更に外反する感じで幾分の屈曲がみられるものである。

8はD26グリット出土の口縁部破片であり、推定口径12cm程となる。茶褐色を呈し、器厚も薄く胎土・焼成とも極めて良好である。坏形土器に含めたが高坏形土器になるかも知れない感じの弯曲をもつものである。

15はF28グリット出土の高台付底部破片である。5cm程の底径となり、糸切底に付高台を施してある。黄褐色を呈し胎土・焼成ともよく堅く焼きしまっている。

### 楕形土器（17）

単孔の楕形土器ではないかと思われる破片である。黄褐色の焼きしまった堅い胎土・焼成であり、推定底孔3cm程である。内面はなめらかであるが器外面はやや底が張って棱を作っている。

〔山田瑞輔〕

### ③ 須恵器（第4図2～5・9～25）

本遺跡から、今回の調査時に出土した遺物中の大多数をしめるのが須恵器であるが、その全てが小破片であり、完形品は皆無であるのみならず、器形を推定復原できるものもほんの僅かである。よって本稿ではその器形の判明するもののみを記した。

器形は、壺・甕及び壷の三類を見、昭和58年度調査（註1）時に出土している蓋類の出土はなかった。

以下、その器形により分類して記す。

#### A類（第4図2～5・9～14）

壺型の須恵器である。2～4は、口縁部を残し他は底部のみで、上部を欠いており完形品はない。2・3は、やや大型であり、胴部から口唇部にかけてゆるやかなカーブを描き、又外面にロクロ整形時の凹凸帯を残す。焼成は良好であるとは言えず、特に2は茶褐色をしており、胎土も粗雑である。4は、上記の2点に比してやや小型であり、器内も薄く、口唇部に至りやや外反し跡手である。胎土も良好で緻密であり、焼成度も良く堅く焼き締っている。

5・14は、高台付壺であり、その内5は大型で器底部は平坦で底部から胴部への立ち上り部が強く屈折して棱をなす。

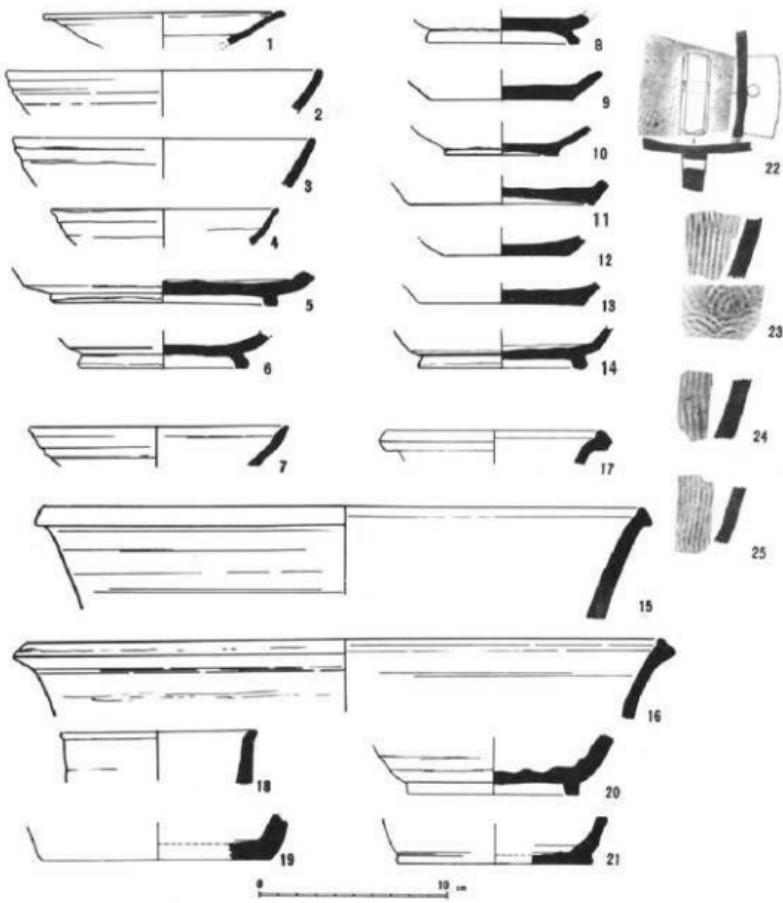
14も器底部よりの立ち上り部にやはり稜を有するが、それは5より弱い。

以上の2点は、いずれも付け高台であり、また高台の外縁を、へら状のもので整形して断面を「く」の字状にしてある点も共通している。

次に、9～13は、高台を有しないものであり、底部面にいずれも右鍵轆による糸切痕を有するものである。10は小型で、器内も薄く底部に至り小さな高台上の厚みを作り出して型を整えているものの、焼成温度も底く全体に褐色を帯びている。12も小型であり、やはり焼成度はあまり良くななく、焼き締りも悪い。

#### B類（第4図17～22）

壺形である。17は長頸の壺の口縁部と考えられる。口唇部を三角形に折り曲げ、内・外部に棱線をつくり出している。胎土、焼成共に良好であり、内面と外面口唇部、即ち焼成時の火面に当る部分



第4図 松本工業高校遺跡出土遺物実測図(1:8)

に黄緑色の自然釉が出ており美しい。

18は、垂直状に立ち上るいわゆる単頭の垂の頸部と考えられ、やはり火面に当る部分（器の内側）に美しい自然釉を少し残すが、火裏に当る部分は青灰色のままである。胎土は17・18共緻密であり、焼き締りも良い。

19～21は、いずれも壺の基底部であり、20のみが高台付である。

19は、胎土は緻密であるが、整形がやや雑であり、内外面共に小さな凹凸が見られ、又底部内側に縦輪成形時の回転圧痕を数条残している。20は、高台付壺であり、付け高台である。高台の内側底部に右縦輪による糸切痕を有し、又器の内部底面に数条の回転指圧痕を有する。

上記の二点が青灰色をなすのに対し、21は胎土、表面共に黄褐色をしており、胎土は緻密で焼き締りもよい。内側底面及び外面に所々自然釉が黄緑色に光っており、又内側底部にやはり成形時の指圧痕線を残している。さらに外面の器底部に一段の縁を作り出して、高台状の基底部を有している。

22は、耳壺である。耳が付されていたためその周辺の脛部がかろうじて残ったものであり、全体の形を知ることができないが、おおよそ50mm内外のものと思われる。その大きさの割合に器壁は薄手であり、表面に浅い敲き締め痕を残す。又器体表面に焼成時の飛沫によると思われる釉が黄褐色に付着しており、内部は青灰色を示している。

しかし、この壺の最大の特色は脣部に比して大きく、又厚い耳であり、それは器壁からやや脣形に開いて突出しており、ゆるやかな弧を描いて器体の弧と平行している。断面は弱い台形をなす。一穴を有し、それは耳の中心部よりわずかにはずれ、又器壁寄りに孔されている。器片が小さいため全形はもとより、耳の数も四耳壺か否かの数の推定も不可能である。胎土、焼成共に良好である。

#### C類(第4図15・16、28～25)

壺類を集めた。15・16は壺の頸部口縁であり、15は口唇部に一条の溝を残らし、頸部と並んでいる。頸部整形に伴つてついた細かい回転条痕が無数に横帯しているが、2・3mm毎にやや強い条痕が付されており、帶状をなしている。これは整形時に表面を整えるための用具の巾を示していると考えられ、興味深い。

16も15と同様、大きな壺の頸部上端であるが、整形時の用具幅を示す帶状の条痕は2・3mmである。圧痕は1に比して弱く浅い。

28～25は、いずれも壺の脣部の小破片であり、表面に敲打痕を有する。器壁内側は24・25は無釉で、へら状のものによる整形がなされており、28は同心円紋が見られる。

なお、28の胎土には、雲母片が見られ、焼成も弱い。24・25は堅緻である。いずれも器形の全形は推定すらできない。

以上須恵器について述べて来たが、壺の形態よりして、平出第5様式（註2）に、また、壺（長頸の壺及び、短頸の壺の口縁部）の形態より、松本市北方の古窯址群出土の遺物にその類例を求めれば、「田溝中の沢8・24号古窯址」（註3）及び「反町ムジナカワ第1号古窯址」（註4）出土のそれ求めることができよう。なお、これらを「愛知県豊根山古窯址群」（註5・6）の副年に相比するならば折戸10号から、黒釜78号窯式に相当すると考える。附近の住居遺跡としては本郷村三才山七本松遺跡等が上げられる。

〔太田喜幸〕

④ 灰釉及び線釉陶器（第4図1・6～8）

4点の出土をみた。これもいずれも小破片である点は、須恵器と同様である。器形は、皿及び壺である。

A類（第4図1）

皿であり、当遺跡から今回1点のみ出土した。器内は薄く、整形もていねいである。側縁に一段の浅い段を有しており、口唇部はやや外反して丸味を帯びている。

B類（第4図6～7）

灰釉の壺類は全部で2点である。6は、高台付壺の底部であり、その付け高台の口縁部を断面「く」の字状に整形してある。7は、口縁部であり、器壁外面に線釉整形時の痕を数段有し、やや難なつくりを感じさせる。口唇部に至りやや外反を見せる。上記2点はいずれも胎土はきわめて緻密であり、表面の灰釉も美しく、つるつるとした手ざわりである。

C類（第4図8）

線釉高台付壺底部で、底面の器内はやや厚く、高台はやはり「く」の字状を示す。釉は、高台内底面には塗付されていない。

以上灰釉及び線釉陶器について述べて来たが、前述の須恵器等と合せ考へて、平出第5様式（註2）に相当し、また「信濃史料」における分類の第Ⅲ類に帰属することができよう。

〔太田喜幸〕

註1. 「長野県立松本工業高等学校遺跡緊急発掘調査報告書」1979, 3 長野県立松本工業高校  
松本市教育委員会

註2. 「平出」昭和30年2月 平出遺跡調査会

註3. 「松本市田溝中の沢古窯址の調査」河西清光（信濃17-9）

- 註4. 「東筑摩郡・松本・塙尻市誌第2巻」 東筑松本・塙尻市郷土資料編纂会
- 註5. 横嶋彰一 「愛知県猿投西南麓古窯址群」 愛知県教育委員会 昭和32年
- 註6. 横嶋彰一 「土器の発達、須恵器」 世界考古学大系4
- 註7. 「信濃史料」 信濃史料編纂会



発掘調査の風景  
昭和55年8月5日(火)撮影

### III まとめ

先ずお断わりから記さねばならないことに心が痛む。それは松本工業高校のプール建設に伴う記録保存のための緊急発掘調査の調査団長として、各種涉外、調査進行上の指揮等一手に引き受けた精力的に事に当たられた中島豊晴先生が、病氣入院という事態になってしまったことである。そのため、本来なら中島先生に高い見識からまとめていただくわけであるが、その任でない私が、本稿を代わって書くこととなつたため、中島先生の意とするところを全て記せないことを容赦いただきたい。先生の一日も早い全快退院を願い、その時点で更に補足すべきはして頂くことを心から願っている。

松本工業高校敷地遺跡は、かねてから遺物出土があって周知の遺跡となっていたが、その中心となる遺構の所在地は、今日まで把握できないでいた。昭和58年度、格技室の新設に伴う緊急発掘調査では弥生期から平安期に及ぶ多量の出土遺物の他に中世の陶磁器等の出土もあって、住居址等遺構の存在を期待したのであるが、残念ながら検出できず、後世の畠地の石垣検出で垣的なもののが想起されたにすぎなかった。この地点は、かつては現地表面より相当に低いことが判明し、敷地及びグランド造成に際して、他所からの土砂の運搬のあったことが発掘調査の土層からも明らかとなつてゐる。遺物は運搬した土に多く含まれていたことから、北側段丘上に集落構築が想像されていた。

今回プール建設に伴う緊急発掘調査が、再度松本工業高校敷地遺跡地内で行われることになり、その建設用地が、前回、集落が想像されていた地点の延長線上にあること、一部水田化されているものの原地形に近いこと、表面探査で遺物が得られること等を勘案して、遺構の検出に期待がもたれた。しかし、残念ながら期待どおりにはいかず、遺構の確認もなく、出土遺物も極めて少量という、発掘参加者にとっては落胆としか言いようのない結果で終わることになった。またしても発掘地点が集落の縁辺からはずれた場所であったわけである。

しかし考え方によれば松本工業高校敷地遺跡の範囲を縮約していく上で、二回の発掘調査は大きな成果を上げたと言わねばならない。出土遺物の磨減状況からして長距離を流されたとは考えられなく、やはり周辺に居住遺構の存在があるものと考えられる。薄川の沿岸毎に流路の変更があり、その流れに沿つて微高地が形成され、その自然堤防上の地形に居住地が求められたのではないかと想像される。

出土遺物は少量であり、完形品の出土ではなく、すべて小破片である。図上復原で器形の判明するのもわずか一点という貧弱さである。時期的には、弥生後期に比定されるものが僅か一片出土して、今回調査した遺物の年代上限を示している。残る大部分は、土師器、須恵器で僅かに灰釉陶器片の出土がみられた。いずれも平安期に比定されるものである。前回の出土遺物内容からすると今回は時期的

にも、量的にも、器形の上からも限定された少ない内容といえる。前回と相通する点は、平安朝の出土遺物に主体があるということである。この平安期に遺跡の増加するのは松本平の一般的な傾向であり、信濃国府の松本移転や莊園による農地拡大、更に鉄器の普及による農作業の能率化等がその背景にあるものと考えられる。そして経済的基盤の上昇と流れがあり、そのあらわれの一つを灰釉陶器に見ることができよう。すなわち現在の愛知、岐阜県の窯で焼かれた灰釉陶器が、広く長野県下各地で使用されるようになり、当遺跡でもその出土があることである。

前回の調査報告書の結語に大久保知巳氏は、弘法山古墳をはじめとする中山古墳群の存在とそれらを支えた集落とに視点を当てて、出川、並柳、神田、筑摩、縣、源地等今後注意すべき地域としているが、今次調査でも古墳に結びつく資料は得られなかった。しかし、今後とも注意して行かねばならない地域であることは確かである。

今次調査に当たり、松本工業高校の校長先生をはじめ職員の方々、生徒会や風土研究会などの生徒諸君並びに松本市教育委員会の方々には、大変な力添えをいただいた。報告会の折、中島団長の「遺構・遺物に恵まれない調査で感激がうすいが、長い発掘調査経験の中でこんなに暖かい組織は今回がはじめて」と言われたことが印象に残る。労多くして成果の少ない発掘調査であったがその遂行する姿には学究的な心打たれるものが多くあったことを記してお礼の言葉としたい。

〔 山田瑞穂 〕

## IV 発掘調査に参加して

### 薄川の流れ

松本工業高等学校風土研究会顧問

北野 道

薄川の流れはどのように変化してきたのであろうか。松本工業高校風土研究会は今まで学校敷地が薄川の流域の遺跡に指定されていた関係から、発掘調査を中心に考古学的諸問題に取り組んできたと聞いている。

昭和55年4月に長野工業高校から転勤してきた筆者は、以前から中信地方の技術史や産業考古学的問題に关心があるので、風土研究会の顧問を引受けることになった。しかし4月当初に生徒諸君と話し合って、従来の考古学的な古代研究よりも工業高校の風土研究に相応しい「風土と産業」という観点から松本地方の産業史を研究することをアドバイスしてきた。メンバーは電気科の2年生が主力であり、当面は「松本地方の電力開発」の足跡と現状を調査研究することにしていた。

学校の北側を流れる薄川の上流には明治32年に舟付地籍に建設された薄川(第1)発電所があり、その上流の巖山荘の近くには明治45年に建設された薄川第2発電所がある。更にその上流には第3、第4発電所がそれぞれ大正、昭和時代初期に建設されてきた。これらの発電所に着目して現地調査を進めていた。

その最中に、一方では学校のプール建設予定地が松本工業高校遺跡に関連があるので、発掘調査を完了しなければプール建設工事ができない問題が起ってきた。そのため松本市教育委員会や中信考古学会の指導のもとに風土研究会が中心となり、生徒会、インターラクタクラブに協力を求めて発掘作業を行なうことになった。

別記のように6月には発掘調査準備会がもたれた。また7月中旬には約50名の生徒が参加して発掘学習会を開催し、風土研究会会长丸山元靖(2EA)が発掘についての説明を行なった。このような準備段階を経て8月上旬から発掘調査が開始されたのである。珍しい古代の遺物に夢と期待をよせて炎天下の発掘となつた。期待する遺構や大物の土器類は遂に出現しなかつたが、薄川の流れの痕跡は明瞭に把握できた。深く続く砂礫層が流れの変遷を雄弁に物語っていた。

この発掘調査と平行して薄川上流への発電所の調査も計画的に実施してきた。今年度の風土研究会のテーマは発電所の調査と遺跡発掘の二つの研究テーマに取り組むことになったが、いずれも薄川の流れに深い関係をもつものであった。松本に古代から住みついた人々は薄川の水によって生活を支え

てきたに違いない。また松本の近代化は明治8年2年の薄川発電所の建設によってなされ、文化の灯はこの薄川の水力発電の恩恵に浴するものであった。

真夏の炎天下に汗を流し、スコップで掘り返えしながら、古代の謎と現代の夢を探索した。過去を照らし現在を見つめて未来を夢るために歴史研究は重要であろう。正面玄関脇にある「青年像」の横から流出する井戸水（冬期間は止められている）を飲みながらこれが古代と現代とを結ぶ薄川の流れを象徴している味のように思えた。それにしても昨今の社会は近代化したといっても、人間の営みの本質や自然の流れはそれ程大きく変化していないと実感したこの夏の貴重な体験となった。

終りに、この発掘調査に献身的に参加してくれた生徒会の役員、インター・アクトクラブ、風土研究会のメンバーの諸君は松本工業高校のプール建設の大事業の一翼を担ったといっても過言でないと思っている。また連日ご指導頂いた中島、山田、太田の諸先生に心から感謝の意を表す次第である。

## 松工二度目の発掘

松本工業高等学校風土研究会顧問

矢島純一郎

私の発掘への参加は8年前の柔道場建設予定地（当時）を発掘調査しなければ工事の着工が出来ないという事で調査が行われた時からですが、ほんの少しですけれど発掘とは何だろう？とか、どういう事をするのかな？と考えさせられたのは今回の調査に参加し、話題に加わり、汗を流させて頂いたからだと思います。前回は市の依頼により、丁度その年の春発足したばかりの風土研が適当であるからという事で「人手」として応援をする立場での参加であった。その為細い打合せは考古学会の方々と既に発掘調査に幾多の経験、歴史を持つ他校の風研。信大の学生が中心で顧問の私も口程とその時に何人位の「人手」が出せるか、又は何人位必要なか位しか知らされていないし、発掘に予備知識を持ち合わせない私には質問の仕ようもなく、入った情報（説明をしてくれた事）以外は盲人のようであった。当時松工の風研は木曾地方の風物史の研究という事で休日にはテレコを持って木曾に行っていたから「これはとんでもない事が舞いこんだものだ」と思ったが、意外にも余り文句を云う者はおらず、かえって将来の風研の基礎となるだろうという上条君の話しだった。いよいよ貞享の太陽の下で8月7日がトレンチの発掘、その翌日からグリッドの発掘に入ったように記憶するが、私は7日の日は土器片数枚を見つけただけであった。しかし発見した時はあの小学生頃夢中で田畠の中から土器片や矢尻を探して歩いた頃の感動を思い起こさせてくれた。しかしこの時の本校の生徒の参加には3つ程の問題があった。1つに顧問の私より先に事務所を通して「1人当り日当3000円を出すから参加してくれないか」と生徒に話がされていたが日が経つ内にその額は少なくなりそうな気配であっ

た。（実際には800円位と聞いた）その為お金に困られた生徒は全く途中から進る気をなくしてしまった。遺物が少なかった事もあるが細かな説明はされなかつたし、学校の資料も少なく合宿計画を立てたが（合宿所がないからと校内にテントを張つて）1日短縮した。又最後まで土を動かす「人足」であった。以上の中から共通して考えられるのは学生はやはり知識欲が強い、にもかかわらず欲求を満たせられなかつた事に尽きる。

今回のプール建設予定地の発掘調査は前回と異なり早くからその計画のある事を知らされており、調査団の先生方以外は松工生の参加一本に絞るという事、又風土研も発足当時と比べ、前回の調査に中学生として参加していた丸山君が現会長である事、それと新たに顧問として「産業考古学」で豊富な経験と知識を持っておられる北野先生が加わって下さって尚調査団の先生も教育者ばかりで生徒への指導に積極的な方ばかりである事、生徒会執行部も又インター・アクトクラブも顧問の先生の御指導もあったとは思いますが、自分達の事と執えて参加してくれる事になり心強く思えた。いよいよ夏休みも近づき7月6日（土）に会議室で市教委の神沢さんと、今回の調査団長の中島先生、木曾東の大田先生、三郷小の山田先生、本校の校長、事務長、生徒会顧問の上条先生、事務の山田先生、生徒会の平出副会長、インター・アクトの三村会長、教頭、顧問で発掘の進め方等細かい打合せが行われ、学校で用意するもの、個人個人が用意する物までが分担され、生徒も独自の学習会を企画し、手のあいた所で背丈もある茅や藪の混在する草を刈り、休日に入る前日には出来あがった鉄パイプの杭を使って8月4日に瀧田PTA副会長の好意で御借りしたトランシットを用いグリッドの測量をした。今年は農家の人々にとって冷夏と云われ氣の毒であったが、私達にとっては涼しくて発掘には良かったとも云える日射しの中で、遺物は少なかつたけれど、土器の歴史や当時の生活を回想させてくれる様な先生方の説明を聞きながら発掘が出来た。遺跡らしさはなかつたが、私の様な者にとっては、実力に合つた、そして発掘の方法や、遺跡や遺物に対する考え方を勉強するのには調度良い規模の発掘で実のあるものであったと思います。

この調査で御指導をして下さった調査団の先生方や県との連携等をして下さった事務所の先生方、市教委の神沢さんに感謝をすると共に今後これを基に益々風研が発展してゆけば幸いと思います。

### グリットP-10を発掘して

松本工業高等学校生徒会長

（8EA）大川 東

私は今まで考古学については何の関りももつていなかつた。もちろん興味などもなかつたから、当然自分が発掘調査に参加するなどまったく想つていなかつた。しかし私も発掘に参加することになつ

てしまった。

それは私が  
生徒会の仕  
事にたずき  
わっていた  
からである。

7月中旬  
の発掘のた  
めの校内の  
学習会のあ  
と、いよい  
よ8月の暑  
い日さしの  
さしかかっ



た頃、調査団の先生方や、風土研、インターフェクト、生徒会本部の人達が集まつた。さっそく穴の掘り方（土のはがし方といった方が正確なような気がする）や、出土品の処理など大まかな事を教えてもらい、いよいよ発掘がはじまつた。

私は北の端（P-10）のグリッドで作業をすることになつた。スコップで5cmぐらい掘つて、さて遺物があるかなとかがみ込んで目をこらして丹念に見ていたのだが一向にそれは見つからない。移植ゴテでごそごそやつてると「カチン」と音がした。「もしやこれは？」と期待したが、残念ノそれはただの石。そうこうしていると、調査団の先生が「ほらほらそこにあるぞ。」と私に言つたのです。しかしそれを見て私は、正直に言つて少しがっかりしたのです。実はもう少し壺とか皿とかそんな感じのものが出てくるのではないかと思っていたからなのです。まあそれでも掘つてゐるうちに出てくるんではないだろうかと思い、気をとりなおしてまた移植ゴテと土との戦いをはじめたわけです。しばらくして小さいものはボロボロと出てきたのだけれど、やっぱり大物は出できません。

そうこうして15cmぐらい掘り下げた頃、調査団の先生方が薄川の流れの状態を見るために私のグリッドを深く掘つてくれと言つてきました。私はまたがくつきました。実際に松工遺跡のあたりは昔薄川の河原で、砂利層があるのであります。でも先生方に言つてはいけないし、スコップを持ってザクッザクッとはじめたのです。60cmぐらい掘つたところでスコップにあたつて何か皿のような物の遺物が出てきたのです。先生方にそれを見せると、平安時代のころのものだそうで、私としてはやっと大物（といえるかどうか？）が出てきた。他のところからもまだ出でていないし、いくらか安心したのです。その後も掘り続け、最終的に150cmぐらい掘つたと思います。

数としては、そんなに出ませんでしたが、大きいのも出たし、まあまあでした。先生方に見てもらった結果今回の場所はあまり遺物の発見もなく、そんなに掘ることもないだろうということでした。初参加の感想としては、実に根気のいる仕事だと思いましたが、昔の生活様式を調べ歴史を知ることは大事な事なので、機会があれば本などで勉強したいと思います。

### 発掘調査に一日参加

松本工業高等学校生徒会副会長

(3TA) 黒木 恵美子

私が発掘調査にかけた日は、夏だというのそれほど暑くもなく、雨の降りそうな暑さ空だった。新しくプールを建設するということではじめられたこの調査に対して関心はなかった。「松工に、遺跡らしい遺跡などあるものか」と思いながら生徒会の役員として参加した。

草のボウボウとはえた土地。やる気なさそうにのったら、くったらとはじめる。

風土研究会、インター・アクトクラブ、生徒会と、顔なじみや初顔とペチャクチャ話しながらはじめた。

遺跡と石とれんがとなんの区別もつかない私たちは、友だちと話をしながら楽しく発掘した。しかし、私の掘ったところからは土器のかけらが少し出た程度であった。他の場所からは弥生時代や平安時代のものが出ていた。

調査の予定としては、はやく終わった。一週間組んでいた日程も、2、3日で終わりそうだった。私は初日、一日だけ参加しただけであったが、長い連休に久しぶりに友人たちに会い、話ができるのがうれしかった。

私としては、同じ遺跡を見るにしても、発掘をするにしてもエジプト、ギリシャ等にあるような大きな遺跡みてみたいと思う。石とも遺跡ともみわけのできない小さいものに対して、どうも満足感がなかった。

### プール建設の影に

松本工業高等学校生徒会書記

(3TA) 赤羽 幸子

去る8月、プール建設予定地の遺跡発掘調査が行われた。私はわずか2日参加しただけだが、発掘

について良い勉強になったと思う。まず、発掘を始める前の作業が大変なこと、発掘調査に使用する数々の器具のこと、発掘方法の善悪等、調査に参加するまで知らなかつたことが沢山あったようだ。

今思ひ返してみると、掘っても掘っても何も出てこなくて、それでも「もしかしたら……」という期待を持って掘り続けたという記憶しかないのだが、それでもわずか小さなカケラでも出てきた時は嬉しかったし、発掘調査で一日終わった時の一種独特の充実感は調査に参加しなければ味わえないものだったろうと思う。

私は、一生懸命やらなかつたせいか、この程度の思い出しかないし、プールができる私達は使用することがないのだが、プールが建設される前にもこのような苦労があったのだということを少しでも心に止めておいてもらわればと思っている。

## 炎天下の発掘

松本工業高等学校

インターラクト同好会長

(3MB) 三村文良

こんど松工にもプールができることになった。そのプール建設予定地は、2年前造られた格技室と同様、遺跡に指定されているために発掘しなければ、プールを建設ができないということであった。インターラクトクラブの人達も手伝ってほしいということで、この発掘調査をいっしょにやることになったわけである。

初日はクラブの用事で参加できなかったが、2日目は晴天の中で発掘調査をした。

2m四方を砂利が出てくるまで掘るわけだが、初めてやるので要領がわからなくて、前日出た人と一緒にやることにした。

ただ掘るわけにはいかず、その土の中に遺物があればそれをひろい出していかなければいけない。掘る道具でこわしてもいいと思い少しづつ掘っていった。かけらしか出てこなく、たいしたものでもないように思えたし、ちっとも進まないのでうどんとん掘ることにした。

1つ目は浅くてすんだが、天気が良すぎて暑くて掘っていても汗が出てきて疲れた。出てきた遺物はかけらばかりだった。そのかけらが、いつごろの物で、どういう物で、どういう事に使われたかはいろいろ想像してみた。

2つ目は、もう掘ってもたいしたものは出ないとしんじてどんどん掘っていくことにした。掘っていってもたいした物は出てこなく、数も少なかったし、かけらも小さかった。

最後の方になって、たいした物が出てこないので、半分だけ掘ることになった。やはりたいしたものは出てこなかった。

最後に掘ったのはとても深くて掘るだけで遺物は1、2個しか出なかった。もう掘ってばかりいたので腰がつかれた。

たいした遺物が出てこなかったので私は2日間で発掘調査を終った。

予定よりだいぶ早く終った。天気が良かったのはよいが、そのおかげで次の日、日に焼けてひりひりしてたまらなかった。

でも、この調査によってプールの建設が出来ることになった。しかしたいした遺物が出てこなかつたのは残念だったようにも思えるけれども、炎天下での発掘はたいへんで早くおわって良かったようにも思える。

発掘に参加して自分自身の勉強にはならなかったように思われるが、何も出なかったということでも、プールが建設になったので良かったと思う。

### 二度目の発見

松本工業高等学校

インターフェクト同好会

( SMB ) 柴 靖 則

ばくは、この発掘調査にインターラクトクラブ員として参加した。しかし風土研究同好会員でもある。一年の時には現在の格技室のある所の発掘調査に参加したことがあった。その時にも考古学の関係の人たちが来てその人たちの指揮のもとで穴をほったり、土を運び出したりした。そうした中で出土した物は小さな土器ばかりで、手ごたえのある物はなかった。しかし、だいぶ前にあった松工の火事のあとと思われる層を見ることができてうれしかった。

それから、文化祭でそれを発表することができた。その後他のクラブをはじめた関係で風研の活動に参加できなくなってきた。そして今回の発掘調査で久しぶりに風研に参加した感じがした。

今回の発掘調査に参加したとは言っても、でたのは2日ぐらいですみっこを少しついたぐらいのものだったけど、けっこう汗をかいて疲れたけど、地層をながめたり、土器を見つけたりすることはとても楽しかった。松工のある場所は、大昔には川がほんらんしていた所らしく、そのために住居などはまったくないし、ただ土器のかけらが出るぐらいのもので、少しきみしい感じもしたが最後に先生たちの話を聞いて、その中でこれでプール建設予定地には遺跡がないことがわかったから、プールを建設することができる。といわれたときに、少しは役に立てたと思いうれしかった。それにこういう発掘は土器や遺跡を発見することだけが目的ではなく、あるかないかをはっきりさせるということも一つの目的であるように思った。

## 夢中で探した土器の破片

松本工業高等学校

インターフェクト同好会

(STA) 関 美樹

私は以前から歴史が好きで土器などに興味があったので専門の先生方の指導のもとで発掘調査ができるなんてとてもすばらしいことでした。

調査する場所はピットと呼ばれる正方形にくぎられていて、そこを2人一組で始めはスコップで掘り、土の色が変わってきたところで移植ごてでそっと平らに掘っていました。

しかし、土器らしいものは全く見つからず、本当に出てくるのかと思って掘っていると豆つぶくらいの土器がでてきて「あっ、あった」という感じでその土器のでてきた場所のそばを大切なものでも探がすように夢中で掘りました。しかし、残念なことにこの場所は畑だったので大きなものはでてこなくて、みんなくわなどでこわされてしまったらしく小さな破片のようなものしかでてきませんでした。

そして、石がでてきた時点でもう見込みがないそうなのでちがう場所を掘りましたが、やはり大物はでてこなく破片でした。

しかし、先生がこの土器は弥生時代のものですとか縄文式土器ですかいろいろ教えていただき、何千年もむかしのものが今も私たちの目の前にあるんだと考えるとすごく感激していました。

私は、発掘調査に参加して、最初期待していたような大物はでませんでしたが、とても楽しかったです。

また、高校最後の夏休みによる経験ができてよかったです。

## 古代と現代をつなぐ土器

松本工業高等学校

インターフェクト同好会

(STB) 矢ヶ崎 美保子

最近、松本城の二の丸などの発掘がおこなわれ、当時の歴史の生活様式、食べ物、あるいは下水の処理などいろいろなことが発掘によってわかったわけである。しかし、このような発掘に比べると私たちの発掘は小規模であったが、どのような物が出てくるか、期待は大きかった。

私は発掘というものは、初めてのことだった。初めはめんどうな気がしていたが、いざ土を掘ってやってみるとおもしろかった。ここ松工の回りにたくさんの遺跡があるとはこの発掘をやって初めて知ったことだった。

私たちが発掘したところは、昔は川だったところでそれも下流のほうだったそうだ。そのため上流から流されて来たものが多く土器の破片しか出土しなかった。しかし、出土した中には、白い色をした土器の破片が見つかったのだが、その土器が関西方面にしかないものだそうだ。弥生時代にしてみれば、とてもなく遠い道のりを経て、ここまで運ばれて来たということになる。驚くべきことだと思った。

何千年前のことだが、小さな破片によってあきらかにされていくことは興味深いことである。この発掘調査に参加して古代の人々の生活を想像しながら、現代に生きている私たちがいかに幸せなのかということを深く考えさせられた。

### 自分の手による発掘

松本工業高等学校風土研究会長

(2EA) 丸山元靖

風土研究同好会会长として、この発掘に参加した僕は、今までに発掘体験のあることからみんなの先に立って作業をすすめるよう言われていた。発掘の前に「予備知識」をということで学習会をひらいたりした。

今まで体験した発掘作業では、かなり大きい遺跡の発掘などもあり、今回の松工遺跡の調査では、遺構の発見は期待できないこともあって発掘に対する意気込みはそんなに大きくなかった。みんなの先に立つものとして、これではいけなかったのであろうが……。

それでもみんな初めての体験にもかかわらず、泥まみれになって、40数個のグリッドを発掘した。出土品は、完成品などの大物は出土せず、石ころのようなものばかりを不思議とみんな見つけて、掘りだしてくれた。

グリッド(2m<sup>2</sup>)を掘ったわけだが、はじめ土が硬く大へんだった。

土師器、須恵器、弥生式土器、なかには輪転回転による糸切痕、輪転整形痕の見られるもの、鉄釘も出土した。普段は移植ゴテ、竹べらなどを使う発掘をやってきたが、今回は全工程がスコップ、ツルハシ、ショレンなどを使用して能率をあげるようにした。

いよいよこの地に来年度はプールが完成されるが、このプールの下を発掘した夏の思い出はいつまでも残り、自分の学校の遺跡を自分達の手によって発掘をするというすばらしい体験ができた。

## 見つけた土器のかけら

松本工業高等学校風土研究会

(2EA) 笠井誠司

今回、発掘調査というものに初めて参加した。自分の学校から遺跡が出るかも知れないということを初めて知った。それでその発掘を自分たちでやるということに驚いた。だいたい発掘といえばテレビのニュースでしか見たことがなく、どんなものかよくわからなかつたが、とにかく発掘することになった。

始めに予定地の草刈りや区分けをした。思ったより広い土地だったので、こんな広い所を本当にやるのだろうかと心配した。よくテレビではみんなハケとか竹べらとか小さなスコップを使っているから、そういう物でやっていたら何日もかかるだろうと思った。しかし当日、現場に行ってびっくりした。そこには、スコップ、フルハシ、その他大物があった。もしかしたら発掘じゃなくて土木工事ではないかと思った。テレビではいいところしか撮らないから、ハケとか竹べらを使っているのだろうと思ったけれど。

とにかく2メートル四方の場所を2人で掘り出した。始めのうちは、この場所が以前田んぼだったらしく土が硬くなかなか壊れなかつた。そのうち土の色も変わりやわらかくなってきたところで、そろそろ土器のかけらが見つけられるようになった。土器が出てきても石と間違えて捨ててしまうのではないかと心配したけれど、実際は不思議と見分けることができて、相当小さい物でも見つけられたので驚いた。そのうちに砂礫層になり土器も出なくなりその場所の発掘は終つた。全部で80ぐらいの数だった。発掘した土器は、いろいろな時代の土器が混っているようであった。昔、ここに川が流れていたので上流から流れて来たのだそうだ。8日間で40数個穴を掘つたけれど結局、遺跡のあった形跡がなかつたので終わりになつた。発掘の準備の割には結果はあまりよくなかった。かけらばかりでそれも小さいものばかりだった。これではハケや竹べらを持ってというわけにはいかなかつた。それでも何も出なかつたのよりかけらが少しでも出たのはよかつた。自分の学校の発掘という貴重な体験ができてとてもよかつたと思っている。

ヤマト印刷納

